

友達も自分もうれしくなる、オリジナルバースデーケーキをつくろう

授業者 福永 真紀子

1 本実践の教材について

本単元では、食材の言い方や、欲しいものを尋ねたり要求したりする表現 “What do you want?” “I want---, please.” に慣れ親しむことをねらいとしている。さらに “How many?”

“Do you like---?” “What--- do you like?” “Big or small?” 等の既習表現も使いながら、自分や相手が欲しいものをより詳しく尋ねたり、答えたりする表現を使ってコミュニケーションを図っていくことができるようになる子どもの姿を目指したい。

Unit 7 What do you want? では、パフェやピザづくりなどを言語活動に設定するような単元構成が副教材に掲載されている。そうすることで、果物や野菜の英語表現を使ってやり取りをする場面や状況を教師が設定しながら、子どもたちはたのしんだり、表現に慣れ親しむ姿を生み出したりすることができる。さらに「誰かのために」という思いや「この人に喜んでもらえると、自分も嬉しくなる」という思いをもって活動に取り組める場を設定したり、ここで扱う英語表現に加えて、3年生や4年生の前半で慣れ親しんできた表現を使ってやり取りをする場を設定したりすれば、やり取りの中でより一層相手のことを考え、伝え合う内容を思考しながらコミュニケーションを図る子どもの姿が見られるのではないかと考える。

本実践では、昨年度から共に学校生活を送っており、誰かのために何かをつくることをたのしんでいる、たのしみにしているという学級の子どもたちの様子から「オリジナルバースデーケーキをつくる」という言語活動を設定する。バースデーケーキ（以下ケーキ）にしたのは、誰にでも必ず誕生日がある、そして子どもたちの学習経験・生活経験から「もらって嬉しい」「喜んでもらえて嬉しい」という思いを共有しやすいという理由からである。また、クラスの友達のためにケーキをつくっていくにあたって、好きなケーキの種類やろうそくの大きさ、数、色、形、そしてどんなデコレーションにするかを相手の好みに合わせて考え、ケーキの材料を集めるという必然性が生まれる。さらに、材料を集めるためには “What do you want?” “I want---, please.” の表現だけでは、もらって嬉しい、友達に喜んでもらえて嬉しいケーキにすることは難しいため、詳しく伝え合うために “What --- do you like?” “Do you like---?” “How many---?” “Big or small?” 等の既習表現で尋ねたり “I like---.” “--- please.” 等の表現を使って答えたりする状況を生み出すことができる。

単元の配列上、子どもたちは今までの単元を一つのまとまりで完結しているものとして捉え、活動しているが、本単元を通して「前の単元で使った表現も使えるんだ」という思いをもつことができるようにすることで、既習表現を使いながらよりよいコミュニケーションを図ることができるようになって欲しいと考える。

単元の終盤では、ケーキを渡し合ったり「こんなケーキをつくった（つくってもらった）」と紹介し合ったりする時間を設定する。つくったケーキを共有することも、コミュニケーションをたのしむという上では大切な活動であると考え。単元全体を通して子どもたちが自分も、友達もより大切に思い合うことができるのではないかと考え、この単元を設定した。

2 単元の構想

今回の実践では、次の2点をポイントとして単元を構成する。

- 単元序盤で、外国語活動や学級活動・他教科の授業の中で友達に喜んでもらった経験や自分が嬉しくなった場面を想起する場を設定することで、子どもの思いを高めながら単元を始めることができるようにする。
- 友達のためにつくるケーキの材料を集めるために、欲しいものを尋ねたり答えたりする表現以外にも、既習表現を想起したり共有したりする場を設定することで、自分が材料に使いたいものを正確に集めることができるようにする。

3 研究の視点に沿った具体的取り組み

(1) 相手や目的を意識してコミュニケーションを図りたくなる言語活動と課題設定の在り方

単元の導入では、外国語活動や学級活動の係活動、そして他教科での学習の中で、もらって嬉しかったもの、渡して喜んでもらうことができたものについて想起したり、その時にどんな気持ちになったかを語らせたりする場を設定した上で、本単元の題である“What do you want?”という表現を子どもたちに紹介する。そこでは、3年生のときに外国語活動で学習したグリーティングカードについてを語り出す子どもがいるだろう。そこで子どもの「こんなことやってみたいな」という活動に対する思いを高めることができるようにする。

その思いが高まったときに、子どもたちにこの単元ではどんな活動をしてみたいか問うことで「また誰かのために何かをつくってみたい」「つくったものを渡し合って喜びたい」という思いを引き出し「友達も自分も嬉しくなる、オリジナルバースデーケーキをつくる」という目的を教師から提案する。単元の途中も常に、誰のためにどんな思いでケーキをつくっていくのか、相手や目的を子どもと共に話し合ったり、確認しながら活動を進めたりしていくことで、相手や目的を明確にして活動に取り組み続けることができるようにする。

(2) 見方・考え方を働かせ、対話を通してよりよいコミュニケーションを行うための手立て

本時では、ケーキに使うための材料が集まらなかったり、相手に伝わらなかったりした際に、既習表現を使って伝えようとしたり、伝え方を工夫したりする子どもの姿を目指したい。そのために、前時のやり取りで表出した困り事を教師が見取り、本時のはじめに全体で共有したり「こんなことあった？」と子どもたちに問い返したりする場を設ける。そうすることで、子どもたちは「自分もあった」「でもこんな風に伝えたら伝わったよ」等と、類似体験を想起したり、伝わった表現を共有したりして解決することができるようにする。

また、単元が進んでいく過程で書き溜めている、本単元で使っているフレーズや、今まで使ってきた既習表現をまとめた掲示物を教室に掲示しておき、いつでも見返することができるようにする。子どもたちがそれを見ながら、やり取りを行う際の手がかりとしたり、友達から尋ねられたときに見返したりすることができるような環境を整備する。

(3) 学習内容と思考過程を自覚し、よりよいコミュニケーションに向かうための手立て

本単元では言語活動後に、ケーキに使う材料を集めるための尋ね方・答え方について「どんな英語表現を使ってやり取りしてみた？」と問うたり「やり取りしている友達の反応はどうだった？」と問い返したりする。子どもたちがどうにかして互いに伝え合おうとしている様子を全体で共有することで、自他の表現の工夫やよさに気付くことができるようにする。

また、授業終末には記述・音声による振り返りを行う。やり取りの中でどんなことに気付いたのか、そこで何を考えたのか、思考過程を振り返ることで、よりよいコミュニケーションの在り方を自覚して相手と関わっていく力の素地を育む。また、本時で使った・使うことができるようになった英語表現を音声にて録音しておくことで、次の時間や他の単元でも想起しやすくなったり、使うことができるようになったりすることができるようにする。